

鈴木明彦<sup>1</sup>・藤澤隆史<sup>2</sup>：北海道礼文島へのアオイガイの漂着

Akihiko SUZUKI<sup>1</sup> and Takashi FUJISAWA<sup>2</sup> : Stranding record of the common paper nautilus *Argonauta argo* on the beach of Rebun Island, Hokkaido

はじめに

アオイガイ *Argonauta argo* Linnaeus は、日本列島周辺の太平洋や日本海の暖流域で浮遊性生活を送るカイダコ科のタコである。雌が卵を保護するために形成した螺旋状の貝殻をもつ。アオイガイの貝殻は美しく良くめだつたため、漂着物としても注目されてきた。

アオイガイは日本海側では特に冬季に大量に漂着することが知られている (Nishimura 1968; 中西 1999など)。従来北海道への漂着例は限られていたが、2005年から2007年にかけては石狩湾沿岸 (鈴木 2006 2007; 志賀 2007; 志賀・伊藤 2008) をはじめとして、日本海側やオホーツク海側の各地から漂着が確認された (鈴木 2009)。今回北海道の礼文島船泊沿岸で、2006年に続いて (船木・佐藤 2009)、アオイガイの漂着を確認したので報告する。

採集地点

日本海に面した船泊湾は、礼文島北部に位置する (図1)。この付近は円弧状の海岸線が続く砂浜海岸で、その陸側には低地が見られる (長尾ほか 1963)。この砂浜海岸は、船泊湾の汀線に沿って、幅20m前後の海浜が連続している。

結果

2010年11月20日、筆者のひとり藤澤は、船泊湾大備浜で漂着したアオイガイを採集した。本標本は、波打ち際に大量の流木や貝殻とともに漂着していた。随伴した貝類はエゾタマキガイやユキノカサなどいずれも寒流系種であった。アオイガイは木片などの浮遊性のものと共産しており、これらとともに海浜に打ち上げられたことが伺われる。アオイガイ標本 (図2) は、殻頂が一部破損した貝殻である。殻長99.0mm+, 殻高67.0mm, 殻幅41.0mm。殻は薄く白色で、殻頂は内巻きである。

考察

アオイガイは、別名カイダコとよばれ、全世界の熱帯～暖海の表層域に生息する。日本では北海道以南の日本海側、太平洋側に分布する (肥後・後藤 1993)。日本海側では、アオイガイの大量漂着や大量出現が認められ、一般に死滅回遊や無効分散の例とされる (Nishimura 1968; Okutani and Kawaguchi 1983; 中西 1999)。

今回2010年10月から12月にかけて北海道の各地にアオイガイの漂着が知られたが、このような大量漂着は北海道では2年ぶりである。たとえば、石狩湾沿岸では、従来にな

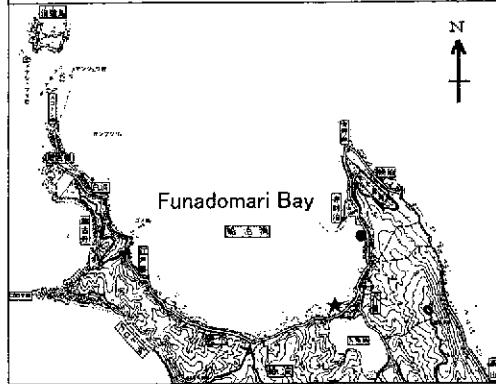
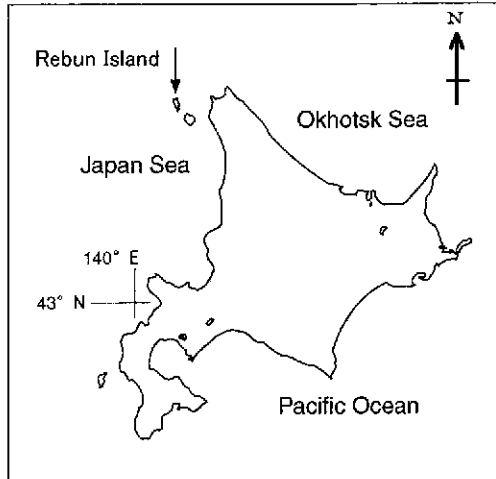


Fig.1 Map showing locality investigated in Rebun Island, Hokkaido.

★ : Stranding site of November, 2010,  
● : Stranding site of June or July, 2006.

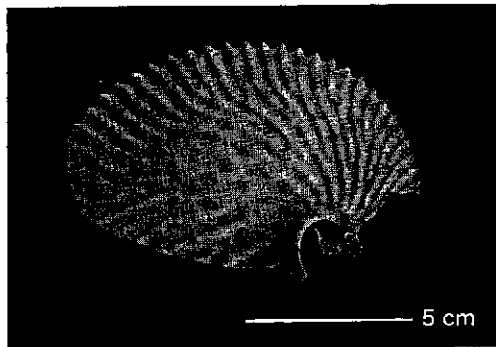


Fig.2 A shell of *A. argo* collected at Funadomari Bay, Rebun Island.

い大量のアオイガイが採集されている（北海道新聞2010年12月5日付朝刊）。なお、2010年11月20日の礼文沖の海面水温（SST: Sea Surface Temperature）は約11.0°Cで、海面水温偏差（SST Anomalies）は平均値より約1.0°C高温である（気象庁 HP 2010）。

北海道日本海側の石狩湾沿岸では、海面水温20~13°Cの時にアオイガイの漂着が確認されている（志賀2007）。このデータと比較すると、礼文沖の11°Cという海面水温はかなり低い。また、今回採集した貝殻は1個体のみで、軟体部を伴わず、殻頂が破損している。このような特徴から、以前に漂着していた個体が、11月中旬に再漂着した可能性も考えられよう。

本報告や漂着物学会メンバーリストの記録に基づいて、北海道におけるアオイガイの漂着分布を見ると、アオイガイの漂着は北海道の日本海側からオホーツク海側までに及んでいる。一方、苫小牧〜えりも岬〜釧路の太平洋側では2010年も漂着記録がない。これは北海道周辺における対馬暖流の流入経路とよく調和している（大川1992）。すなわち、日本海を北上した対馬暖流は、稚内からオホーツク海に入り、知床付近まで南下する。このため知床では稀に暖海性生物が出現している。北海道付近におけるアオイガイの漂着記録は、その生態学的な興味とともに温暖化等の海面水温の変化とも連動しており、継続的な調査が望まれる。

**Summary :** The common paper nautilus *Argonauta argo* drifted on the beach of Funadomari Bay of Rebun Island, Hokkaido, is examined. *Argonauta* shell is associated with driftwood and shell fragments, and are washed ashore due to a severe storm. Stranding of *A. argo* on Rebun Island is presumed to increase of sea surface temperature in the northern Japan Sea in the autumn 2010.

#### 引用文献

- 船木 梓・佐藤雅彦 2009. アオイガイ（カイダ科）の礼文島における記録. 利尻研究 (28) : 11-12.  
 肥後俊一・後藤芳央 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. 693pp. エル貝類出版局, 八尾.  
 気象庁 2010. 気象庁ホームページ (<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>)  
 中西弘樹 1999. 漂着物学入門. 216pp., 平凡社新書, 東京.  
 長尾捨一・秋葉 力・大森 保 1963. 5万分の1地質図幅「礼文島」及び同説明書. 43pp., 北海道開発庁.  
 Nishimura, S. 1968. Glimpse of the biology of *Argonauta argo* Linnaeus (Cephalopoda: Octopodida) in the Japanese waters. Pub. Seto Mar. Biol. Lab. 16: 61-70.  
 大川 隆 1992. 北海道の動気候. 248pp., 北海道大学図書刊行会.  
 Okutani, T. and Kawaguchi, T. 1983. A mass occurrence of the biology of *Argonauta argo* (Cephalopoda: Octopoda) along the coast of Shimane Prefecture, western Japan Sea. Venus 41: 281-290.  
 志賀健司 2007. 北海道石狩湾岸におけるアオイガイの大量漂着. 漂着物学会誌 5 : 39-44.  
 志賀健司・伊藤静孝 2008. 2007年に北海道石狩湾沿岸で見られた暖流系漂着物. 漂着物学会誌 6 : 11-16.  
 鈴木明彦 2006. 北海道石狩湾へのアオイガイの漂着. ちりぼたん 37 : 17-20.  
 鈴木明彦 2007. 2006年秋における北海道石狩湾へのアオイガイの漂着. 環境教育研究 10 : 7-10.  
 鈴木明彦 2009. 海岸漂着物から読む地球環境. Ship & Ocean Newsletter (203): 6-7.

(Received May 30, 2011; accepted June 24, 2011)

<sup>1</sup> 〒002-8502 札幌市北区あいの里 5-3-1 北海道教育大学札幌校地学研究室

<sup>1</sup> Department of Earth Science, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education, 5-3-1 Ainosato, Sapporo 002-8502, Japan

<sup>2</sup> 〒097-1201 礼文郡礼文町大字香深村字ワウシ958-4 礼文町教育委員会

<sup>2</sup> Educational Board of Rebun, Kafuka, Waushi 958-4, Rebun 097-1201, Japan